第４分科会

# 災害対策と大学―私たちが担う役割は何か―

報告者

**三浦 まゆみ**（岩手県立大学 看護学部看護学科 教授）

**箕野　健大**（京都橘大学 看護学部４回生）

**川口　　淳**（三重大学 大学院 工学研究科 准教授）

**似田貝 香門**（東京大学 名誉教授）

コーディネーター

**河原　宣子**（京都橘大学 看護学部看護学科 教授）



自然災害が多発するわが国において、災害対策は避けては通れない重要な課題である。わが国で起きる数多くの災害での経験から、私たちは多くの教訓を得、それを備えの糧としていかなければならない。また、教育・研究機関である大学は全国から集まる学生や教職員を有し、自らの災害対策と共に、地域に還元できる研究･実践活動も行っていく必要がある。東日本大震災から約１年が経過した今、災害対策における大学の役割を考えることは広義のFD活動にもつながるであろう。さらに、学生のキャリア形成においても有意味な議論になると期待する。そこで、今回の分科会では、東日本大震災や台風12号災害における経験を踏まえ、看護学、社会学、地域防災学、そして学生の立場からの実践的なご報告をいただき、災害対策において大学が担うべき役割について参加者の皆様と考えていきたい。

## <第４分科会>

# 災害対策と大学ー私たちが担う役割は何かー

参　加　人　数　　39 名
報　　告　　者
　第1報告者　　三浦 まゆみ　（岩手県立大学 看護学部看護学科 教授）
　第2報告者　　箕野　　健大　（京都橋大学 看護学部 4 回生）
　第3報告者　　川口　　　淳　（三重大学 大学院 工学研究科 准教授）
　第4報告者　　似田貝 香門　（東京大学 名誉教授）
コーディネーター
　　河原　　宣子　（京都橋大学 看護学部看護学科 教授）

### 分科会のねらい

自然災害が多発するわが国において，災害対策は避けては通れない重要な課題である．わが国で起きる数多くの災害での経験から，私たちは多くの教訓を得，それを備えの糧としていかなければならない．また，教育・研究機関である大学は全国から集まる学生や教職員を有し，自らの災害対策と共に，地域に還元できる研究・実践活動も行っていく必要がある．東日本大震災から約 1 年が経過した今，災害対策における大学の役割を考えることは広義の FD 活動にもつながるであろう．さらに，学生のキャリア形成においても有意味な議論になると期待する．そこで，今回の分科会では，東日本大震災や台風 12 号災害における経験を踏まえ，社会学，地域防災学，看護学，そして学生の立場からの実践的なご報告をいただいた．その上で，災害対策において大学が担うべき役割について参加者の皆様と意見交換を実施した．

### 分科会の概要

午前の部では，最初にコーディネーターから分科会の趣旨・講師の紹介・プログラムの進行について説明があり，4 名の報告者の発表が行われた．第 1 報告者三浦まゆみ氏は，「東日本大震災における岩手県立大学の活動」と題して，平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分に発災した東日本大地震により，沿岸から 100 キロ離れた内陸に位置している岩手県立大学での活動について報告した．教職員・在学生の安否確認，予定されていた後期日程入試・卒業式・入学式などへの対応，さらにはボランティアセンターに所属する学生たちの活発な活動が，全国の大学生をも巻き込んだ活動へと発展し，「いわて GINGA-NET プロジェクト」が誕生，夏季休暇期間中 1000 人を超す学生たちが参加し，被災地の仮設住宅の住民のコミュニティづくりに大きく貢献したことについて論じた．第 2 報告者箕野健大氏は，ボランティア団体に参加し，発災後 5 ヶ月目に避難所での被災者の日常生活の調整や，健康管理を行ったこと，避難所住民が仮設住宅へと生活スペースを移行している時期のコミュニティー作りに着目したことについて学生の視点から報告した．ボランティアスタッフは長期的なかかわりをしていくことが難しく，いずれは地域の住民同士で助け合って生活していくことが求められる．そのため，地域ごとのコミュニティを作り上げていくことはとても重要なことであることを論じた．第 3 報告者川口淳氏は，自然災害・防災・減災に関する調査・研究，報告者の大学における自然災害対策の企画・立案支援，防災関連人材育成，防災に関する地域連携について論じた．第 4 報告者似田貝香門氏は，〈生の固有性〉という視点，実践知，職能ボランティアの意義，支援活動の様相，大学と災害時の支援活動，「語られることと共に語り直される」ことの必要性，大学の被災地支援の mission について論じた．

午後の部　質疑応答及び意見交換

「東日本大震災における岩手県立大学の活動」

三浦まゆみ氏（岩手県立大学）

●学生は，被災地での支援活動においてお茶サロンを作った．大学で開講したボランティア研修を受講することを前提として活動をすることとして対応した．

●（災害対策についての学生への教育は）全学部共通科目はない．看護学部では災害看護論の科目があり、そこで学んでいる。他の学部でもその学部の特徴に基づいて行っていると推測するが、掌握してはいない．

●（学生の安否確認のシステムは）ないが，3.11 では学生同士がメール等で安否確認を行い，2~3 日間で約 80% 把握してくれた．私たちは学生に安否確認お願い！と声をかけただけ．

●各学部間で情報交換をしたが 4 学部集まることはなくなりそれぞれが自発的に活動している．医療系に関して言えば，本学にはあまり情報が流れてこなかった．

●あまりにも膨大な情報と思いがあり，（災害看護の授業は）どこに焦点をあてて組み立てればよいのか悩んでいる．思い出したくないこともある．しかし，我々が学生にあるいは看護職に語り継ぐことこそ，大切なのかもしれないと思う．

「ボランティア活動からの学び」

箕野健大氏（京都橘大学 4 回生）

●（ボランティア活動を経験する）前は何をすればよいのかわからなかった．コミュニティ作りなどを考えていた．しかし．現地ではもうすでに自分が考えていた支援はなされていた．相手のことをわかってなかった．相手を知ることで何が出来るのか考えるようになった．

●ただ相手に関心を持つというのではなく．「相手は何を大事にしているのか」を知ることが大切と実感した．病院実習などで思ったが．自分が出来ないことを受け止められなかった．できないことはできないことと認めなければならない．

●安否確認は，必ず存在する学生のコミュニティを活用すると有効かと思う．例えば，ツイッターやフェイスブックなど．

●河原：（災害対策についての学生への教育は）京都橘大学では 2012 年度から入学生全員に教養入門を開始する．その中で災害対策についての内容を取り入れる予定である．

「地域圏大学人の挑戦」

川口淳氏（三重県立大学）

●（自然災害対策室と学生との関わりは）今のところないが．3.11 から学生が街頭に立ち募金を集めるようになった．大学は当初眉をひそめていたが．支援室がサポートするようになった．その後ボランティア希望者が活動できるようにサポートを始めた

●（災害対策についての学生への教育は）全学の共通科目いわゆる教養教育で地域防災論 15 回を開講している．また．学生に災害時の対応が記載されている防災シート（身につけやすい扇子折りの小さなパンフレット）を配ったり，教職の更新講習で防災教育を導入した．

●東海・東南海・南海地震対策で国が動き出したときに．大学のビジョンを出さないといけないタイミングで．副学長にプレゼンする機会があり，変化を大学内で起こせたのはラッキーであった．

●大学の責任である安否確認について，高額なシステムを導入せずとも，学生に一斉メールができる仕掛けを作り．アップロード側はアナログで情報を集めるようにした．

●（地域との関わりについて）最初に地域に入ったのが漁村だった．そこでは，「大学が地域に入ると，長期間の調査に付き合ったが，調査が終わったら文字ばかりの報告書を渡されて疲弊している．大学なんて何もしてくれない」という地域の声があった．したがって，結果として地域に何が反映されるかを考えている．一回入った地域はずっと付き合うし繋がり続ける．

●（職能について）姉歯建築の問題で．職能倫理を問われるようになった．エンジニアは自分の殻に閉じこもりたがる．しかしあの問題から．斬新な発想はスポイルされた．自分の限界をしっかりわかることで．判らないことはわかる人につなげることが大切と認識した．

●（避難訓練の時の授業保障は）授業に支障のない時間にした．防災訓練の予定を学年暦に入れるべ

きだと思うが．１５回講義で厳しいし．1時間は長いという意見もある．

「ボランティアと市民社会：阪神・淡路大震災と東日本大震災からの問題提起」
似田貝香門氏（東京大学）

●大学憲章に学生の安全や防災について盛り込んだ．また全教員に連絡カードを配布して半年毎に常備しているかを確認した．
●安否システムの課題は外国人留学生である．留学生は震災後一斉に居なくなった．確認が大変だった．
●学生のコミュニティを活用した安否確認について，広報室に学生を入れ，ボランティアの呼びかけなどの文書にも学生発想を入れる必要があると思い働きかけたが．うまくいっていない状況．
●職能ボランティアには，応答責任がある．自分の専門に関することはすぐに応答できるが，専門外だと「それは私の専門じゃない」と対応できない．職能とはその人が持っている才能（人として＋専門性）であり，自分に出来ないことは出来る人につなげることが．応答責任だ．職能者は人と社会の間に居る存在であり，職能ボランティアにおいては．技術でもなく理念でもなく．フィールドで必要とするものを瞬時に判断することである．瞬時に判断できる実践知が大切である．自分の専門から「はみ出す」あいまいな部分がある中で判断を求められることがある．
●語り続けるにはパワーがいる．神戸の話しは最初リアリティーがありすぎて．周りに伝わらなかった．話し続けると．抽象度が高くなり相手に伝わるが．単なる講義になり物足りなくなる．しかし，語り続けることこそ大学の使命だと思う．
●専門家はつい，ニーズ調査といってしまうが．ディマンド調査と言うべき．自分はディマンドしか出来ない．ニーズとは人の主観的に感じるものである．ニーズとディマンドは決して一致しないもの．必ずズレがある．そこにボランティアのミッションがある．
●（被災者がボランティアとなり学生に体験談を語りかけ，語ることで再構築して始める，という報道番組を見た．次のステップは何かという問いに）被災者がボランティアをすることは自立である．自立とは支えあいであり．絶望から再生にフェイズが変わるとき．支援者も被災者も，双方が未完成だと思うことで自立が生まれる．相互に変わるというのは．ボランティア経験から感じたことといっしょで．何をしてあげようと思うことではない．

分科会のまとめとして

河原：3.11 から約1年が経過したが．時間の経過は被災を忘却する．しかし大学教育においては語り続けることが大切と感じた．また，同時によき市民を大学は育てなければならない．災害は，いかなる学問分野であっても原点を見つめなおすことができると思う．

箕野：被災地でのボランティア経験が出来たことはとても良かった．とても良い経験の場を提供していただけたことはとてもありがたい．自分が出来ることをしっかり考えていきたい．

川口：教員は学生に育てられる．学生は自分たちに何が出来るのかを語り．忘れたものを思い出させてくれる．このような経験を教育の中でどのように教えるか．しかし，どの領域でも教えられることであると思う．

三浦：過去にも津波の経験はある．時代へ語り継ぐことの重要性を学んだ．災害は忘れたころにくる．

似田貝：阪神淡路のときに．貧困とは経済的にも精神的にも貧しいのだと認識を新たにした．定義だけで判ったように思えるが，そこからはみ出したものがどれだけあるのか．苦しみや受難，すなわちパトスによりそうとは．苦しみを理解しないとできない．人を理解する難しさを自覚することが大事だ．大学とは外に開かれていること．被災地が主であり大学が従であるようになることが大事．

分科会を終えて

最後に，分科会を終えて，今回，報告者であった学生の感想を記載させていただきます．次代を担う学生の声は，私たち大学人の役割を考えさせるものです．
今回の分科会に関わっていただいたすべての方に深謝いたします．ありがとうございました．

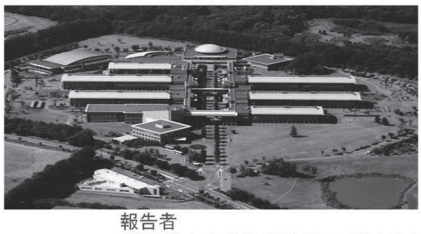
「本当によい経験をさせていただきました．準備不足であったのと，報告者は本当に自分で良かったのかと思っていました．それでも，発表をして，似田貝先生，三浦先生，川口先生のお話を聴かせていただいて，ボランティア活動をするだけでなく，このような場に参加することでより，自分のキャリアアップにつながるのだと実感しました．似田貝先生，三浦先生，川口先生の様々な視点からのご発表は，新たな発見が多くて充実した時間を過ごせました．フロアの方が，自分なんかの話しに感動したとおっしゃってくださったり，コーディネーターの河原先生が，うちの大学の学生は，苦悩を抱えた人と一緒に笑ったり泣いたりできるんです，そのような人材を育てていますと言ってくださって涙が出そうになりました．被災地での体験や今回の発表，大学では学べないことを学ぶ場を提供してくださって心から感謝しています．本当にありがとうございました．」

# 東日本大震災における岩手県立大学の活動
# ー看護学部教員として思うことー

岩手県立大学 看護学部看護学科 教授　三浦 まゆみ

第4分科会　2012.3.4

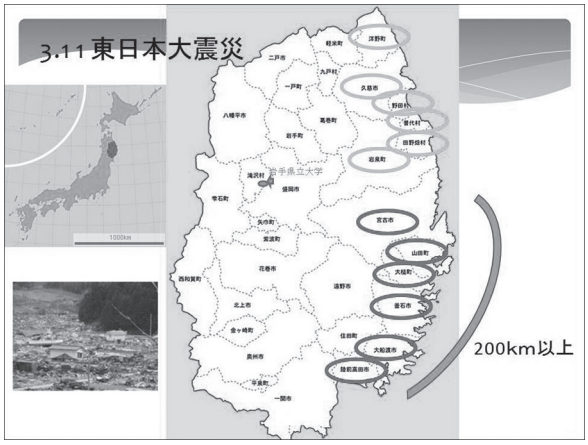
東日本大震災における岩手県立大学の活動
～看護学部教員として思うこと～



報告者
岩手県立大学看護学部　三浦まゆみ

岩手県立大学

1




## 本学の現状

岩手県立大学

2

## 学部別学生数（平成23年5月1日現在）

| 学部・研究科 | 入学定員 | 編入定員 | 収容定員 | 在籍者数 | 社会人 | 編入 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 看護学部 | 90 | 10 | 380 | 383 | 5 | 9 |
| 社会福祉学部 | 90 | 10 | 380 | 412 | 1 | 21 |
| ソフトウェア情報学部 | 160 | 10 | 660 | 732 | 1 | 8 |
| 総合政策学部 | 100 | 10 | 420 | 447 | 0 | 15 |
| *四大合計* | *440* | *40* | *1, 840* | *1, 974* | *7* | *48* |
| 看護学研究科 | 20 | | 45 | 36 | 21 | |
| 社会福祉学研究科 | 18 | | 39 | 35 | 12 | |
| ソフトウェア情報学研究科 | 50 | | 110 | 97 | 5 | |
| 総合政策研究科 | 20 | | 45 | 21 | 12 | |
| *大学院合計* | *108* | | *239* | *189* | *50* | |
| 盛岡短期大学部 | 100 | | 200 | 206 | | |
| 宮古短期大学部 | 100 | | 200 | 212 | | |
| *短大合計* | *200* | | *400* | *418* | | |

*2,581*

岩手県立大学

3

## 震災後の本学の対応

平成23年3月11日　東日本大震災発生
（14:46分発生、滝沢村　震度6弱、宮古市　震度5強）
〈滝沢キャンパス〉 帰宅できない学生110名、
教員11名が大学に宿泊
自家発電で対応、地域住民にも施設開放
〈宮古キャンパス〉 帰宅できない学生1名が
寮生14人と学生寮に宿泊
河南地区避難所に男子学生2～3名が避難

3月12日　電気復旧
〈滝沢キャンパス〉 学生55名、教員13名が大学に宿泊
3月13日 〈滝沢キャンパス〉 学生19名、教員6名が大学に宿泊
3月14日　学部長等関係者の会議開催
3月16日 「東北地方太平洋沖地震　地震対策本部」設置
3月22日 〈宮古キャンパス〉 情報ネットワーク復旧
4月5日 「岩手県立大学災害復興支援センター」設置
4月5日、7日、8日　学長が県内被災11市町村と2広域振興局を訪問
4月15日　学長から全教職員に対するメッセージ

岩手県立大学

5

## 震災後の教学面の扱い

（1）平成22年度卒業式の中止
岩手県立大学・大学院研究科・盛岡短期大学部（当初予定：3月22日）
宮古短期大学部（当初予定：3月18日）

（2）平成23年度一般選抜（後期日程）の中止
一般選抜後期日程は中止し、大学入試センター試験の得点及び出願書類により判定をすることとした。

（3）平成23年度入学式の中止
岩手県立大学・大学院研究科・盛岡短期大学部（当初予定：4月5日）
宮古短期大学部（当初予定：4月4日）
※入学式に代わる「新入生を歓迎する会」を開催
（岩手県立大学・盛岡短期大学部　4月18日、大学院研究科4月20日、
宮古短期大学部　5月16日）

（4）授業開始時期の変更
滝沢キャンパス：4月22日から開始（当初予定：4月12日）
宮古キャンパス：5月18日から開始（当初予定：4月8日）

（5）平成24年度入学試験における震災特別選抜の実施

岩手県立大学

6

## 被災学生への支援

甚大な被害を受けた学部・大学院・短期大学部（盛岡・宮古）に在籍する被災学生への経済的支援として、授業料等の減免及び通学支援を実施

ア　入学料・授業料の減免
　① 平成23年度及び24年度入学生の入学料を減免
　② 平成23年度前・後期及び24年度前期の授業料を減免

**【減免の内容】**

| 費目 | 支援措置 | 支援対象 | 金額 | 免除承認者数 |
|---|---|---|---|---|
| 入学料 | ・原則として全額免除<br>・詳細については相談内容を踏まえて決定<br>・既に納付した後に被災した者に対しては運付 | ①住居の全・半壊<br>②住居の全・半焼<br>③住居の流出<br>④世帯収入の著しい減少 | ［学部・大学院］<br>岩手県内　225,600円<br>岩手県外　338,400円<br>［盛岡短大部・宮古短大部］<br>岩手県内　135,400円<br>岩手県外　203,000円 | ※ 平成23年度入学生<br>［学部・大学院］<br>**34 名**<br>［盛岡短大部・宮古短大部］<br>**13 名** |
| 授業料 | ・原則として全額免除<br>・詳細については相談内容を踏まえて決定 | 同上 | ［学部・大学院］<br>前期・後期　各　267,900円<br>［盛岡短大部・宮古短大部］<br>前期・後期　各　195,000円 | ※ 平成23年度前期分<br>［学部・大学院］<br>**114 名**<br>［盛岡短大部・宮古短大部］<br>**27 名** |

9　岩手県立大学

## 復興支援

13　岩手県立大学

大学ホームページにて教員・職員・学生にボランティア公募
・大学復興支援ボランティアバスの運行
・飲料水ペットボトルの運搬・配布活動
など

## 学生ボランティアセンターの活動

<これまでの主な取り組み>

3/11　地域住民の安否確認
　→独居高齢者宅を中心に、地域の見回り
3/14　災害学生ボランティアセンター開設
3/16　ホームレス支援、安否確認へ
3/21～　陸前高田市災害VCの設置運営支援
3/22～　釜石市災害VCの設置運営支援
　※　卒業時の地域見守り活動は継続実施
4/10　子ども遊びキャラバン隊
　（学生ボランティアバス・ユニセフ（国連児童基金）協働）
　同日、いわてっこ応援！学生ボランティアバス
　（関西の3大学（佛大、関学、神戸学院））
4/11～19　いわてっこ応援！unicef学生ボランティアバス
　（岩手県立大学・盛岡大学・unicefの協働）
4/27～5/8　いわてGINGA－NETプロジェクト（GW期間中）
　→住田町五葉地区公民館を拠点に全国から13大学のべ512名が滞在しながら、沿岸部のボランティア活動を実施
5/14～仮設住宅コミュニティ支援活動
　→お茶っこサロンを釜石で実施
　→週末を中心に学生ボランティアバスの運営
　陸前高田市災害VC及び釜石市災害VCで
　応急仮設住宅のコミュニティ形成支援を実施
8/3～9/20　いわてGINGA-NETプロジェクト
　→全国146大学から、1086名の学生が滞在
　大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、
　住田町ほかで活動を展開

高田小学校での体育館清掃活動

被災した写真の洗浄作業（八戸）

15　岩手県立大学

## いわてGINGA-NETプロジェクト

- この夏、7週にわたり、全国146大学から1086人の学生ボランティアが岩手県住田町に集結し、被災地支援のボランティア活動に取り組んだ。
- 被災から数か月を経て、岩手県内では若いボランティアが不足していた。一方、学生たちは、被災地のために何か力になりたいと願いながらも、移動手段や宿泊場所・食事の確保の難しさから活動になかなか参加できずにいた。
- こうした被災地の要支援ニーズと学生のボランティアニーズを効果的に結びつけるため、被災県に所在する本学の学生ボランティアセンターのメンバーが立ち上がり、NPOの協力を得て「いわてGINGA-NETプロジェクト」が結成された。
- これにより、これまでにない規模で、全国の学生ボランティアによる被災地支援の活動を行った。

いわてGINGA-NET　16　岩手県立大学

## 復興ガールズ*

「復興ガールズ*」は、本学総合政策学部の女子学生9人組。学生個々の就業力向上を目指す「IPU-E プロジェクト」に採択され、大学公認のプロジェクトとして活動を始めました。

東日本大震災により岩手県、特にも沿岸部は甚大な被害を受け、行政の取り組み以外ではボランティアによる瓦礫の撤去、募金などの活動が行われていますが、学生としてこれらの活動以外に出来ることはないのだろうかと自分たちなりに考えました。

そこで被害を受けた地域の、生活の糧となる仕事の復興の手助けをしたいと思い、様々なイベント・企画を通じて岩手を知ってもらい、岩手の商品の販売をお手伝いしています。

活動1　「いわて復興フェア」（復興ガールズ*が企画・主催）
　9/16(金)～17(土)　いわて銀河プラザ（東京銀座）

取扱商品：①「松光」（ガールズが企画・デザインし、高田松原の倒れた松を用いたキーホルダー）、②裂き織りコースター、③三陸わかめ、ほおずきジャム、④宮古のレトルトカレー、⑤三鉄オリジナルグッズ、⑥三陸お楽しみ袋

25　岩手県立大学

## いわて高等教育コンソーシアム（5大学連携）

岩手大学　岩手県立大学　岩手医科大学　富士大学　盛岡大学

き・ず・な　プロジェクト（12月～1月　4日間）

連携大学学生ボランティアによる

小中高校生の学習支援

仮設住宅のコミュニティ再生支援事業

## 学部、教員の主な取り組み

(1) 看護学部では、母子への保健指導、健康調査のための家庭訪問活動、避難住民への支援、被災地養護教諭の支援ニーズ把握のための活動実態把握、専門職に対する支援、健康相談等を行った。

(2) 社会福祉学部では、週1回程度の遊びの場を提供、災害を経験した子どもたちの心のケアと保護者の支援のための研修を実施した。

(3) ソフトウェア情報学部では、静岡県立大学等と連携して、三陸地域の情報インフラ及びインターネット接続の復旧作業などの支援を行った。また、平成23年度は、震災復興に関連する研究テーマを学部プロジェクトとして設定した。

(4) 総合政策学部では、いわての防災・復興支援プロジェクトを立ち上げ、防災・復興WGを設置し、①社会調査、②産業経済・行政、③社会・環境基盤の3チームによる研究を行うこととした。また、各市町村の復興計画策定に携わっている。

(5) 盛岡短期大学部では、震災廃棄材の再資源化とそれを活用した応急仮設住宅の供給についての提案を行った。また、学部研究として「震災発生時、発生後、そして復興期における多文化共生コーディネータの役割に関する調査研究」を行うこととした。

(6) 宮古短期大学部では、「三陸地域情報システムの構築」をテーマに災害時における安否情報の収集・提供を行う「安否確認システム」の構築、地域の避難所等場所情報を提供する「避難所情報MAP」の作成を行うこととした。

17　岩手県立大学

## ＜看護学部＞

災害への備えに
関するこれまでの
看護活動

1998年4月　岩手県立大学開学

岩手山噴火の予兆情報
⇒全学岩手山防災研究プロジェクト結成（～2002年3月）

看護学部独自の活動（1998年10月～）
⇒　勉強会の開催　⇒　研究会発足へ

2003年9月　日本災害看護学会第4回年次大会開催

2004年8月　岩手県災害看護ネットワーク協議会設立

看護職を対象とした研修会を開催（～現在）

## 震災後、看護学部として

## 学生に対して

学生ネットワークを通じての早急な安否確認

入学者に対する情報収集と個別支援

担任による全学部生への個別面談の実施

⇓

経済的支援：学費免除、各種奨学金

生活支援：学生寮の優先的受付

学習支援：文具類の提供

## 教員の活動

宮古市、釜石市、大槌町等

各自治体の要請にもとづく
- 住民の安否確認
- 健康状態、生活状況把握
- 物資供給
- 復興支援に関する情報提供等

## 他の組織と連携によってなされた支援

いわて子育てネット
- 母子避難所（盛岡市内）への被災地から避難した母子支援

日本助産師会岩手県支部、ジョイセフ
- 被災地への母子支援

内閣府男女共同参画室
- 女性健康相談・支援活動

（NPO参画プランニングいわてより→日本助産師会岩手県支部へ）
- 避難所での相談

岩手県看護協会　災害支援ナースの一員として
- 避難所にて住民の健康管理

## 学生とともに－被災者へのボランティア

盛岡市内の避難者に対するボランティア（社会福祉協議会と協議しながら）

避難所におけるお話を聴く、指圧、マッサージ

仮設住宅に住んでいる住民を対象とした保育園児たちの太鼓、学生たちのさんさ踊り、そして炊き出し

秋より月1回仮設住宅の集会所へ出向き、話し相手、血圧を測るなど行っている。
2年生15名ほどのボランテイア（山田町・・カッキーズ）

## 被災者でありながら被災地で働く仲間たちへ

発生～3ヶ月
- 一緒に被災者への健康調査を実施する
- 訪問し、お話を聴く
- 必要な物資を届ける

4ヶ月以降
- 研修会を開催する。（その時期にあわせた）
  - 岩手県立大学看護実践研究センター事業として
  - 講座の特徴を生かして
  - 学会や協議会事業として
  - 公開講座として

学ぶというより、涙するところを求めて参加したという受講生の声が印象的だった。

## 私自身のこととして

- 3.18　日本災害看護学会先遣隊より岩手に入ることの連絡
- 3.21　上記の方々と山田町へ
- 3.29　県大船渡保健所、大船渡市、県立大船渡病院へ
- 4.12　釜石市健康調査へ
- 4.15　県大船渡保健所支援物資持参
- 4.25･26　災害看護の授業（4コマ　4年生対象選択科目）
- 4末～5初旬　災害看護の体験手記の執筆者を探す
- 8.1　陸前高田市内介護老人保健施設へ
- 9.3　看護職対象の今年度第1回災害看護研修会開催
- 11.12　上記第2回災害看護研修会開催
- 12.17　看護学部公開講座　にてこれまでの経過説明

学部のボランテイア・復興担当として大学との連絡調整、教員への情報提供などを行ってきた。

所属する講座として

（資格−保健師、養護教諭1種、高校（保健））

- 3月～4月
  - 5月から開始の実習をどうするか　→実習市町村の確保に奔走
  - 震災後の状況の情報収集（被災地、盛岡市などの状況）
  - 学部で取り組んだ被災地の健康調査へできる限り参加
- 実習指導で現地に行く途中に寄って様子を聞く、消耗品など必要なものを届けるなど　これまでの個々の教員のつながりを生かして情報を得、適宜学部へ報告
- 9月　大船渡保健所の管内研修会に教員が講師の一人を担う
- 9月、2月　養護教諭などを対象とした園芸療法（兵庫県立大学）の研修会を被災地3箇所、及び盛岡で開催
- 2月　県内保健師を対象として　小千谷市の保健師を講師とし、「被災者の生活再建と保健活動」と題した研修会を開催

岩手日報　2012年（平成24年）1月

# 震災の記憶　一首に

東日本大震災で大きな被害を受けた気仙沼市の気仙沼高校文芸部の部員が、震災の記憶を短歌に詠んでいる。町が大きく変化した時の衝撃、家族との別れ、友人への思い、復興に向けた責任感。作品からは生徒たちの素直な心の震えが伝わってくる。

## 死別と友と重い責任と

気仙沼高文芸部

「こおおと音立ててせまりくる波にのまれて目に焼く情景」

「お母さんは生きてるよ」と言ってたあの子の言葉信じて。

「ごめんね、ごめんね」と泣く母の背中を見つめ、ただ立ちすくむ

# 被災地におけるボランティア活動からの学び

京都橘大学 看護学部４回生　　箕野　健大

京都橘大学看護学部看護学科で４年間「人によりそう看護」という教育理念のもと看護について学んできました．実習や講義などで様々なことを学んできましたが今回被災地へ行ったことは大学の中にいただけでは学ぶことができないようなことを学ぶことができました．

ボランティアは 2011. 8. 11. -8. 16 の一週間、経験をさせていただきました．

日本在宅ホスピスケア研究会という団体に参加し、避難所での被災者の日常生活の調整や、健康管理を現地スタッフの方々といっしょに行いました．

ボランティアに参加した時期が、被災後５ヶ月目であったため、避難所住民が仮設住宅へと生活スペースを移行している時期でもありました．そのため、仮設住宅への訪問活動も行いました．

避難所での被災者とのかかわりとしては、コミュニティ作りに目を向けたかかわりがみられました．ボランティアスタッフは今後，長期的なかかわりをしていくことが難しく、いずれは地域の住民同士で助け合って生活していくことが求められます．そのため、地域ごとのコミュニティを作り上げていくことはとても重要なことです．

ボランティアに参加して、現地のスタッフとともに活動をしていると、スタッフ主体ではなく、住民主体での活動が多く見られました．朝の掃除の時間や、お昼のお茶会の時間など、住民の方が指揮をとり住民同士で開催していました．

スタッフはこのようなコミュニティが作られるような関わりをしていくことが重要であると考えました．

## 学び

被災地支援をさせていただいての学びとして、コミュニケーションをとることの重要さ、また、その方法であったり、気をつける点など学ぶことができました．

私は、看護学生の立場で現場に参加させていただき、はじめは自分には何ができるのか不安でいっぱいでした．ボランティアに参加してみると、そんなことも言っていられませんでした．実際の活動として，「何かをする」とかではなく、本当に一緒に生活をしていくというような感じでした．被災後５カ月目ということもあり避難所生活をされている方はとても少なくなってきていました．活動内容としてはおもに、仮設住宅への訪問活動で

した．

## 大事なこと

**コミュニケーションは、受け手と話し手双方が気持ちを共有しあうことが重要である．**

そのためには，相手のことを知ろうとし，その人に関心を持つことでより相手のことを知ることができる．相手の背景を知っていくこと，上下関係を作らないことが重要であると学びました．教科書に書いているような“傾聴”や“共感”をすることは簡単にはできないなということを学びました．

これまで病院実習などで，対象者の方と，コミュニケーションをとることがありました．その時は看護実践を行うために情報収集をしないといけない，と気持がさき走ってしまい対象者のことをみることができていなかったこともありました．

しかし，被災地では「コミュニケーションをとる意味を考える」必要がありました．

何のためにコミュニケーションをとるのか，コミュニケーションそのものには意味はないのかもしれないが，何かをするにあたってコミュニケーションは必要不可欠なものである．と考えることができました．また，それと同時にコミュニケーションをとることの難しさを感じました．

被災地では会話をすることすら難しい状況であったことも確かでありました．

「あんたらになにがわかるん？」「なにしにきたん」そのような言葉も聞かれました．このときに自分は何をしているのだろうと気付くことができました．

先に述べましたが，何かをしてあげようという気持ちが少しでもあると対象者を見ることができずニーズをくみ取ることができないのではないかと考えます．

それは，何かをしようと考えている時点でそこからは自分の主観が先行してしまうからです．対象の訴えをしっかりとくみ取ることができず自分なりのアセスメントをしてしまうことにつながり自己満足の援助になってしまうのではないかと考えました．

そこで，相手のことをしっかりと見ていき，何ができるのかということを考えることが大事なのだと学びました．

コミュニケーションをとる意味だけでなく，その際の方法，態度もとても重要である．目線を合わせることやタイミングなど，会話だけでなく行動から読み取れるその方の背景など相手のことを知るためには様々なところに目配りする必要がありました．

被災地に限らないとおもいますが瞬間瞬間を大事にしていくことの重要性を学びました．

これはコミュニケーションをとるタイミングを逃さないこと，瞬間瞬間をとらえてアクションを起こしていくことです．

朝，避難所内の掃除の時間があるのですが，掃除を一緒にしながら会話をしたり，朝起きた時に挨拶をしたり，お昼のお菓子の時間に一緒に休憩したりと瞬間を大事にしながら瞬間をとらえて相手のことを知っていくことが重要でありました.

教科書では，「傾聴」「共感」するとことは，コミュニケーション技術の中でとても重要なことと書かれています．実際に病院実習でも自分自身，共感や傾聴という技法を使ってきました．しかし，自分がしていた「共感」「傾聴」は言葉だけで行っていたものであったと気付きました.

被災された方々と関わることで本当の意味での「共感」「傾聴」を考える時間がありました.

自分自身は被災していない中で，被災された方の言葉に共感や傾聴が出来ない場面がありました．それは，家が全壊してしまい，これからどうしたらいいかわからないといった内容であり，「そうですよね.」といった声かけが正しいのか，どうするべきであったのか悩みました．その時は何も言えず，黙ってしまいました．また，その後に他の人との会話で，共感するような言葉がけをした際，「あんたに何がわかるん？」といったような言葉が返ってきました.

共感すればいいんだと思うのではなく，信頼関係の構築，相手に関心を持つこと，平等な関係で話をすること．これらがコミュニケーションを作る中で重要なことであると考えました.



被災地でコミュニケーションを取る際に一番気をつける必要があったことは、自分が発する言葉一つ一つを相手はどのように受け止めてしまうのかと考えることでした.

この、大震災を受けたことにより、被災地の方々はとても敏感になっているのではないか、ということを考え今まで以上に一つ一つの発言には注意してきました.

自分の発言が相手にどのような影響を与えていたかはわかりませんが、今回のこのような姿勢は忘れないようにしていく必要があると感じました.

コミュニケーションをとるうえで、自分の思いをすべて言葉にのせたとしても、その思いがすべて相手に通じることは難しいと考えます．それは、人それぞれ受け止め方が違うこと、考え方が違うことでそのようなことが起こりえると学びました.

## 今後、どのように生かしていくか

今回学んだコミュニケーション技術については，今後の看護活動に生かしていきたいと思います.

正直、はじめ抱いていた気持ちに，何をしてあげられるだろう、といった気持ちが少しありました．しかし、今回の経験を通して、自分には何ができるのだろう．という気持ち

を持つことが大切であると学び，気持ちが変わっていきました．これから看護師になり様々な患者さんに出会っていく中でとても重要な気持ちであると考えます．看護をするうえで対象理解は最も重要なことであり．看護師にとって最も重要な仕事ではないかと考えます．

対象者に対して何かしてあげようと考えてしまうと，自分主体での援助になってしまう．そうではなくて，自分には何ができるだろうと考えることで，自分の行動，援助を客観的にみることができ，考えていくことができると考えます．それは相手に関心を持つことであり，よりよい人間関係を構築することだと考えます．

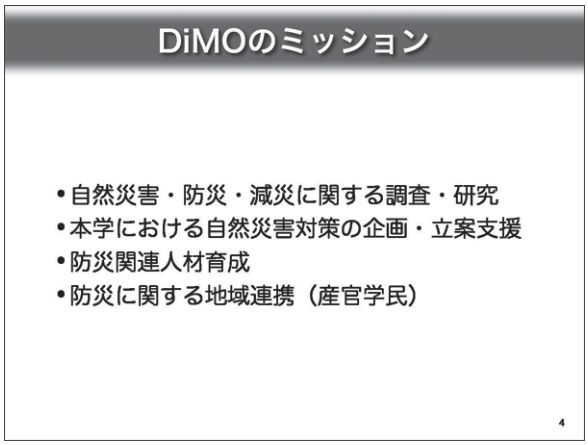
対象のことを何でもかんでも知ることは少し間違っているということも感じました．疑問に思ったこと，知る必要があると思います．しかし，相手も話したくないことはある．言いやすい相手がいる．そういった関係の中で全てを知ろうとすることは相手にとってのストレスになってしまいます．そうではなくて相手のことを知ろうとすること，この姿勢がとても重要であると感じました．

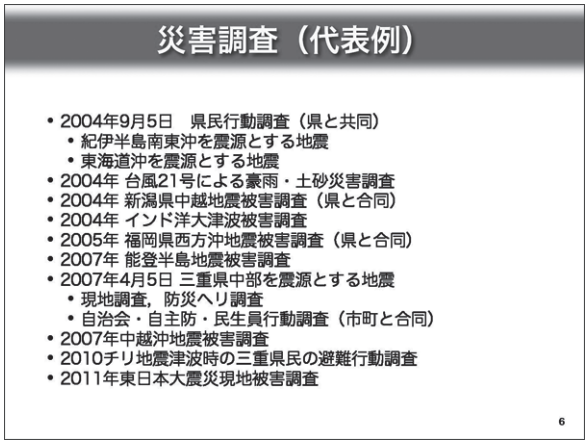
被災地で実践道具の少ない中、さまざまな工夫をし、その場にある道具だけでできる処置やケアをしていくということはとても参考になる行動でした．このような、臨機応変な対応はこれからの看護活動をしていく中で参考となる行動であったと考えます．このことは、病院ではあまり考えることはできないかもしれませんが、在宅ケアをする際にとても見習える行動でありました．

在宅では、コストパフォーマンスやその方の生活にあったケアなどを考えていく必要があります．もし、今後、在宅での活躍の場があるのであれば、今回学んだことをしっかりと生かしていけるようにしていきたいです．

# 地域圏大学人の挑戦～真の地域連携を目指して～

三重大学 大学院 工学研究科 准教授　川口　淳





## 研究例（代表例）

- 災害情報伝達システムの研究開発（工学部・NTTと共同）
- 簡易耐震補強システムの研究開発（工学部・地元企業と共同）
- 地理情報システムを活用した防災教育教育手法の開発（教育学部・三重県と共同）
- 緊急被害予測システムの開発研究（生物資源学部・防災科研・三重県と共同）
- 避難所における被災者支援に関する研究（医学部）
- 密集市街地の防災力向上に関する研究（工学部・三重県と共同）
- ライフライン企業における防災対応力向上に関する研究（工学部・中部電力）

7

## 耐震ふすま、耐震サッシを用いた民家実物大実験

実用性の検証のため、在来工法の民家に耐震ふすま、耐震サッシを使用し実大実験

→震度6相当の地震の揺れに対し、建物内に被害なし＝生存空間の確保

クレーン車により棟木をつかみ振動を加える

耐震ふすまをバランスよく配置

新しく提案した耐震サッシ

Jkawa-Laboratory 11/1/2007

## 企業防災：今後の取組み

三重県下約2,500の事業所に業務継続計画についてのアンケート調査を行う

現在アンケート調査票送付完了
各事業所からの返信待ち

業務継続計画とは
・災害発生後いかに迅速に業務を再開していくか
・災害発生後いかに業務を中断することなく継続していくか

回収したアンケート調査票を集計・分析後、個別の診断票として各事業所にフィードバック

調査票送付準備風景

## 研究例（代表例）

- 災害情報伝達システムの研究開発（工学部・NTTと共同）
- 簡易耐震補強システムの研究開発（工学部・地元企業と共同）
- 地理情報システムを活用した防災教育教育手法の開発（教育学部・三重県と共同）
- 緊急被害予測システムの開発研究（生物資源学部・防災科研・三重県と共同）
- 避難所における被災者支援に関する研究（医学部）
- 密集市街地の防災力向上に関する研究（工学部・三重県と共同）
- ライフライン企業における防災対応力向上に関する研究（工学部・中部電力）

10

## 本学における自然災害対策

11

## 本学の防災体制

3.11 の大学の対応①
•14:46 地震発生
•15:40 マニュアルに従い第１次体制（初動体制）の災害対策本部を５階企画チームに立ち上げ（統括監、災害対策本部事務局長補佐、総務課長ほか総務課３名，施設課長ほか施設部２名）
•16:00 津市災害対策本部沿岸部に避難勧告発令
•16:10 学内放送設備で３Ｆ以上に避難指示
•16:20 生物資源学部実習船伊勢湾内に待避
•17:05 webサイトにて本外の状況掲示
•17:30 構成員に帰宅指示
•18:30 翌日の入試の実施を決定→Webサイトで広報
•23:30 文科省より構成員の被害情報連絡要請

12

## 本学の防災体制

3.12 の大学の対応②

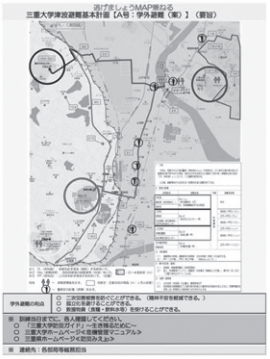
- 7:30 津波被害警戒本部情報所設置（衛星電話配備）
- 8:00 想定受験者の把握（入試本部）
- 入試実施
- 13:50 津波警報→津波注意報
- 14:00 津波被害警戒本部情報所解散
- 14:06 三重県災害対策本部より学生・教職員の被災状況の問い合わせ
- 14:10 学内一斉メールシステムで学生の安否確認発信

13

## 本学の防災体制

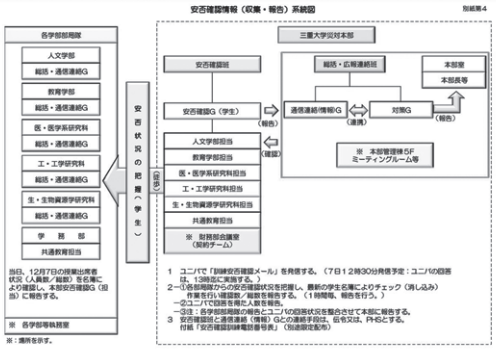
14

## 本学の防災体制




15

## 本学の防災体制




16

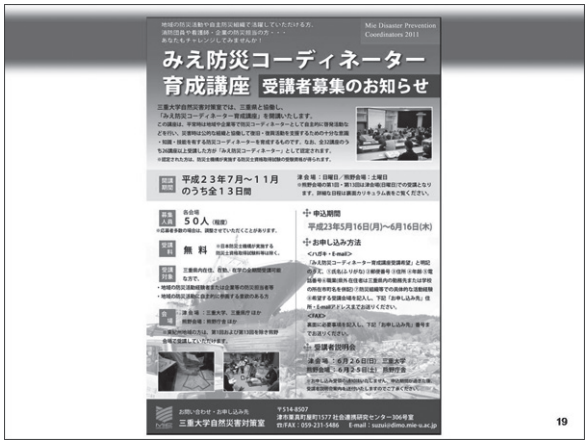
## 防災関連人材育成

17

## 防災人材の育成

- **みえ防災コーディネータ育成講座**
  - ・三重県との共同事業（H16～）
  - ・H20~ 三重大学DiMOで実施
  - ・これまで６期で400名程度を県内に排出
- **美し国おこし・三重さきもり塾（H21～）**
  - ・文科省科学技術振興調整費 地域再生人材創出拠点の形成
  - ・三重県の地域再生計画とリンク
  - ・大学院レベルの社会人・学生の要請

18



地域の防災活動や自主防災組織で活躍していただける方、
消防団員や看護師・企業の防災担当の方・・・
あなたもチャレンジしてみませんか！

Mie Disaster Prevention Coordinators 2011

みえ防災コーディネーター
育成講座 受講者募集のお知らせ

三重大学自然災害対策室では、三重県と協働し、
「みえ防災コーディネーター育成講座」を開講いたします。
この講座は、平常時は地域や企業等で防災コーディネーターとして自主的に啓発活動などを行い、災害時は公的な組織と協働して復旧・復興活動を支援するための十分な知識・知識・技能を有する防災コーディネーターを育成するものです。なお、全10講座のうち3講座以上受講した方が「みえ防災コーディネーター」として認定されます。
※認定された方には、防災と機関が実施する防災と復興指導組織の受講要綱が得られます。

受講期間 平成２３年７月～１１月のうち全１３日間

津会場：日曜日／熊野会場：土曜日
※熊野会場の第１回・第13回は津会場（総合福祉会館）での受講となります。詳細な日程は講座がキックスタ時をご覧ください。

定員 50人（程度）
※応募多数の場合は、調整させていただくことがあります。

受講料 無料
※日本防災士機構が実施する防災士資格取得試験料等は除く。

受講対象
三重県内在住、在勤、在学の企業関係者・個人
なお、
・地域の防災活動経験者または企業等の防災担当者等
・地域の防災活動に参画意向・参画する意欲のある方

会場 津 会 場：三重大学、三重県庁ほか
熊野会場：熊野市庁舎ほか
※実施会場は、第１回および第13回を除き予定会場を提案しています。

申込期間
平成23年5月16日(月)～6月16日(木)

お申し込み方法
<ハガキ・E-mail>
「みえ防災コーディネーター育成講座受講希望」と明記の上、①氏名ふりがな②郵便番号③住所④年齢⑤電話番号⑥職業(学生・会社員・公務員の所属先または学校の所在地所属先を明記)⑦防災組織等での具体的な活動経験⑧希望する受講会場を記入し、下記「お申し込み先」住所、E-mailまでよろしくお送りください。
<FAX>
裏面に必要事項を記入し、下記「お申し込み先」番号までお送りください。

受講者説明会
津会場：6月26日(日)、三重大学
熊野会場：6月25日(土)、熊野庁舎
※ホームページ(http://dimo.jp/)にて、申込書様式を掲載。受講説明資料等も近日中にUPしますのでご覧ください。

お問い合わせ・お申し込み先
三重大学自然災害対策室
〒514-8507
津市栗真町屋町1577 社会連携研究センター306号室
TEL/FAX：059-231-5486 E-mail：suzuki@dimo.mie-u.ac.jp

19

平成２３年度「みえ防災コーディネーター育成講座」カリキュラム

| No. | 月日／曜日（熊野会場） | 会 場 | 第１時限（津：10:30～12:00）（熊野：11:00～12:30） | 第２時限（津：13:00～14:30）（熊野：13:30～15:00） | 第３時限（津：14:45～16:15）（熊野：15:15～16:45） |
|---|---|---|---|---|---|
| 第１回 | 7月3日/日 | 三重県庁講堂 | 開講式 | みえの防災文化づくり | 三重県の防災対策 |
| 第２回 | 7月10日/日（7月23日/土） | 三重県総合文化センター セミナー室Ｃ | 危機管理 | 災害心理学（避難所対応） | 東海・東南海・南海および内陸地震に備えて |
| 第３回 | 7月24日/日（7月30日/土） | 三重大学工学部 大会議室 | 気象学 | 風水害 | 土砂災害と住民 |
| 第４回 | 7月31日/日（8月6日/土） | 三重大学共通教育総合 190番教室 | 災害時要援護者 | 建築防災 | 防災教育 |
| 第５回 | 8月7日/日（8月20日/土） | 三重大学講堂 小ホール | 防災まちづくり | 被災者支援・図上訓練 | |
| 第６回 | 8月21日/日（8月10日/土） | 三重大学講堂 小ホール | 災害社会学 | 災害と行政 | 防災コミュニティー |
| 第７回 | 9月11日/日（10月1日/土） | 三重大学共通教育総合 190番教室 | 災害医療と応急対応 | ライフライン | ボランティア |
| 第８回 | 10月2日/日（10月11日/土） | 三重県総合文化センター 大研修室 | 災害と保険 | 災害とマスコミ | 企業防災 |
| 第９回 | 10月16日/日（10月22日/土） | 三重大学工学部 大会議室 | 自主防災 | 地震災害史 | 気象情報 |
| 第10回 | 10月23日/日（10月29日/土） | 三重大学講堂 小ホール | バイスタンダー | 普通救命講習 | |
| 第11回 | 10月30日/日（11月5日/土） | 三重大学講堂 小ホール | 消防活動 | タウンウォッチング・避難対応 | |
| 第12回 | 11月6日/日（11月12日/土） | 三重県総合文化センター セミナー室Ｃ | 災害警備活動 | 初動対応・図上訓練 | |
| 第13回 | 11月13日/日 | 三重県総合文化センター 視聴覚室 | 防災コーディネーターに期待すること | 閉講式 | （防災士資格取得試験） |

※「月日／曜日」の下段（　）内は熊野会場受講日です。
※講師の都合により、講座日程等が変更される場合があります。

20

## 防災人材の育成

- **みえ防災コーディネータ育成講座**
  - 三重県との共同事業（H16～）
  - H20~ 三重大学DiMOで実施
  - これまで６期で400名程度を県内に排出
- **美し国おこし・三重さきもり塾（H21～）**
  - 文科省科学技術振興調整費 地域再生人材創出拠点の形成
  - 三重県の地域再生計画とリンク
  - 大学院レベルの社会人・学生の要請

21

三重大学

防災人

美し国おこし・三重
さきもり塾
第3期生 募集

三重県の防災・減災活動を担う人材を育てます。

22

## 三重さきもり塾

### 知事からのメッセージ

三重県知事
鈴木英敬

平成 23 年３月 11 日に発生した東日本大震災は、死者・行方不明者合わせておよそ２万人にもおよぶ、我が国における戦後最悪の被害をもたらしました。この未曾有の大災害によって、これまでの地震防災対策について、大幅な見直しが求められています。

三重県におきましても、東海・東南海・南海地震の発生が危惧されており、東日本大震災により明らかになった課題に対応するため、「緊急地震対策行動計画」を策定しました。この計画に基づき、緊急に取り組むべき対策を集中的に行っているところです。

津波からの避難、住宅の耐震化、地域における訓練、防災啓発等、県民の命を守るための対策を推進していく中で、防災人材の育成はこれまで以上に重要となります。このさきもり塾から輩出される人材が、三重県を守る「さきもり」として、地域や企業、行政の中で、活躍されますことを期待しています。

23

## 三重さきもり塾

### さきもり塾　アドミッション・ポリシー

**■このような人を育てます**

美し国おこし・三重さきもり塾は、防災・減災活動に関して、自然科学分野や人文社会科学分野の広範囲な知識を持ち、先進的・実践的な防災・減災のための計画立案とそのマネジメントを行う能力を養います。特に、演習や実習における少人数教育、対話を重視した教育を通して、現場で活躍するための応用力や実践力を養います。

**■このような人を求めます**

①自然、社会、文化、人間に対して幅広い関心を持ち、それらの基礎学力を持った人。
②防災・減災活動を理解するために必要な自然科学、人文社会科学に興味を持ち、それらを応用する能力と自主的に学ぶ意欲を持った人。
③防災・減災活動に対する旺盛な好奇心を持ち、真摯に問題を探求し続ける姿勢を持った人。
④防災・減災活動における問題解決の実践に情熱を持ち、三重県地域に貢献しようという気概を持った人。

24

第４分科会

## 三重さきもり塾

### さきもり塾　特別課程と入門コース

■特別課程
特別課程を修了すると「美し国三重のさきもり」として認定されます。カリキュラムは7つの科目から構成され、定められた修了要件に従って履修します。

■入門コース
入門コースを修了すると「美し国三重のさきもり補」として認定されます。特別課程のカリキュラムの中の2科目を受講します。

【入塾の対象とする人物像】
- ●三重県地域の住民の方
  （自主防災組織、自治会のリーダーなど）
- ●三重県地域の企業に勤務する人
  （災害対策や事業継続計画立案担当者など）
- ●三重県地域の地方公務員
  （災害対策や防災の施策立案担当者、教員など）

| 課　程 | 共通日程 | 開　講　日 |
|---|---|---|
| さきもり塾<br>特別課程 | 入塾式<br>平成24年4月14日（土） | 平成24年度　（土曜日 13:00～18:00）【全26回】<br>■前期（4～7月）13回　■後期（9月～2月）13回 |
| さきもり塾<br>入門コース | 卒塾式<br>平成25年3月16日（土） | 平成24年度　（土曜日 13:00～18:00）【全10回】<br>■前期（4～7月）5回　■後期（9月～1月）5回 |

25

## 三重さきもり塾

| 平成24年度日程 | 学　習　内　容 | 講師陣 |
|---|---|---|
| 4月14日 | 1　地震の発生メカニズムと災害対策 | 島崎邦彦（東京大学名誉教授）、鈴木康弘（名古屋大学）、大林潤（三重県防災危機管理部）、畑中重光（工学研究科） |
| 5月19日 | 2　津波の発生メカニズムと災害対策 | 今村文彦（東北大学）、金田義行（海洋研究開発機構）、川口淳（工学研究科） |
| 6月2日 | 3　気象災害の発生のメカニズムと災害対策 | 二宮洸三（海洋研究開発機構）、高田真（気象キャスター）、立花義裕（生物資源学研究科） |
| 6月23日 | 4　地理的要因からみた災害と災害対策 | 廣内大助（信州大学）、谷口真人（総合地球環境学研究所）、宮岡邦任（教育学部） |
| 7月14日 | 5　防災情報テクノロジーとシステムの構築 | 舟本誓（東京工業大学）、浅野耕一（秋田県立大学）、福山薫（生物資源学研究科） |
| 9月29日 | 1　災害医療と支援体制 | 堀内義仁（国立病院機構災害医療センター）、武田多一（附属病院）、中西唯公（医学系研究科） |
| 10月20日 | 2　災害心理と支援体制 | 重川希志依（富士常葉大学）、中川一郎（ホリスティック心理教育研究所）、兜玉克哉（人文学部） |
| 11月10日 | 3　防災教育と啓発プログラム | 福和伸夫（名古屋大学）、南部美智代（災害ボランティアネットワーク鈴鹿）、川口淳（工学研究科） |
| 12月1日 | 4　リスクマネジメント | 奈良由美子（放送大学）、多々納裕一（京都大学防災研究所）、葛葉泰久（生物資源学研究科） |
| 1月12日 | 5　復興まちづくり | 中林一樹（明治大学）、東日本大震災復興まちづくり担当行政職員（未定）、浅野聡（工学研究科） |

26

## 三重さきもり塾

| | | |
|---|---|---|
| 4月21日 | 1　地震対策の計画 | 酒井俊典（生物資源学研究科）、三島直生（工学研究科） |
| 5月26日 | 2　風水害対策の計画 | 葛葉泰久（生物資源学研究科） |
| 6月16日 | 3　災害対応行動の計画 | 林　克己（自然災害対策室）、福本智一（三重県防災危機管理部） |
| 7月7日 | 4　企業防災の計画 | 川合一明（慶学連携企業防災研究プロジェクト「きぼう会」、地域地震情報株式会社） |
| 10月6日 | 5　地域防災の計画 | 川口　淳（工学研究科） |
| 11月3日 | 6　防災まちづくりの計画 | 浅野　聡（工学研究科） |
| 12月8日 | 7　地域で支える災害医療体制の計画 | 溝口　明（医学系研究科） |
| 1月26日 | 8　まとめ | 浅野　聡（工学研究科） |
| 4月21日 | 1-2　地震対策の計画 | 酒井俊典（生物資源学研究科）、三島直生（工学研究科） |
| 5月26日 | 3-4　風水害対策の計画 | 葛葉泰久（生物資源学研究科） |
| 6月16日 | 5-6　災害対応行動の計画 | 林　克己（自然災害対策室） |
| 7月7日 | 7-8　企業防災の計画 | 川合一明（慶学連携企業防災研究プロジェクト「きぼう会」、地域地震情報株式会社） |
| 10月6日 | 9-10　地域防災の計画 | 川口　淳（工学研究科） |
| 11月3日 | 11-12 防災まちづくりの計画 | 浅野　聡（工学研究科）、高田裕市（株式会社都市環境研究所） |
| 12月8日 | 13-14 地域で支える災害医療体制の計画 | 岩佐光雄（附属病院）、須藤啓広（医学系研究科） |
| 1月26日 | 15　まとめ | 浅野　聡（工学研究科） |
| 5月12日 | 1　地震対策のマネジメント | 花里利一（工学研究科） |
| 6月9日 | 2　風水害対策のマネジメント | 葛葉泰久（生物資源学研究科）、堀智晴（京都大学防災研究所） |
| 6月30日 | 3　災害対応行動のマネジメント | 林　克己（自然災害対策室）、福本智一（三重県防災危機管理部） |
| 7月21日 | 4　企業防災のマネジメント | 川合一明（慶学連携企業防災研究プロジェクト「きぼう会」、地域地震情報株式会社） |
| 10月13日 | 5　地域防災のマネジメント | 川口　淳（工学研究科） |
| 11月17日 | 6　防災まちづくりのマネジメント | 浅野　聡（工学研究科） |
| 12月15日 | 7　地域で支える災害医療体制のマネジメント | 丸山一男（医学系研究科） |
| 1月26日 | 8　まとめ | 浅野　聡（工学研究科） |

27

## 三重さきもり塾

| | | |
|---|---|---|
| 5月12日 | 1　地震対策のマネジメント | 花里利一（工学研究科） |
| 6月9日 | 2　風水害対策のマネジメント | 葛葉泰久（生物資源学研究科）、堀智晴（京都大学防災研究所） |
| 6月30日 | 3　災害対応行動のマネジメント | 林　克己（自然災害対策室）、福本智一（三重県防災危機管理部） |
| 7月21日 | 4　企業防災のマネジメント | 川合一明（慶学連携企業防災研究プロジェクト「きぼう会」、地域地震情報株式会社） |
| 10月13日 | 5　地域防災のマネジメント | 川口　淳（工学研究科） |
| 11月17日 | 6　防災まちづくりのマネジメント | 浅野　聡（工学研究科） |
| 12月15日 | 7　地域で支える災害医療体制のマネジメント | 丸山一男（医学系研究科） |
| 1月26日 | 8　まとめ | 浅野　聡（工学研究科） |
| 5月12日 | 1-2　地震対策のマネジメント | 平林典久（工学研究科） |
| 6月9日 | 3-4　風水害対策のマネジメント | 葛葉泰久（生物資源学研究科）、堀智晴（京都大学防災研究所） |
| 6月30日 | 5-6　災害対応行動のマネジメント | 林　克己（自然災害対策室） |
| 7月21日 | 7-8　企業防災のマネジメント | 川合一明（慶学連携企業防災研究プロジェクト「きぼう会」、地域地震情報株式会社） |
| 10月13日 | 9-10　地域防災のマネジメント | 川口　淳（工学研究科） |
| 11月17日 | 11-12 防災まちづくりのマネジメント | 浅野　聡（工学研究科）、高田裕市（株式会社都市環境研究所） |
| 12月15日 | 13-14 地域で支える災害医療体制のマネジメント | 山田典一（医学系研究科）、田口　修（医学系研究科） |
| 1月26日 | 15　まとめ | 浅野　聡（工学研究科） |
| 9月29日 | 中間報告会 | 各指導教員 |
| 2月2日 | 研究成果報告会 | |

28

## 三重さきもり塾

29

## 防災に関する地域連携（産官学民）

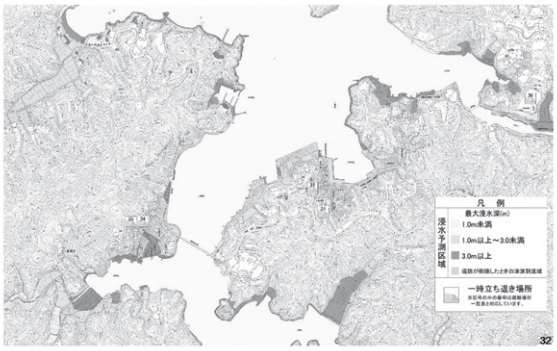
30

## 地域で取組む災害時要援護者対策
（三重県–三重大学共同研究事業）

- **鳥羽市浦村町今浦地区（漁村集落）**
  - ・地域住民(自治会・自主防災会)
  - ・行政(鳥羽市,三重県)+消防(鳥羽市消防)
  - ・鳥羽市社会福祉協議会
- **四日市市富洲原地区住吉町（都市型密集住宅地）**
  - ・地域住民(自治会・自主防災隊・市民防災隊)
  - ・行政(四日市市,三重県)+消防(四日市消防)
  - ・みえ防災コーディネータ

31

## 鳥羽市浦村町




32

## 鳥羽市今浦地区の概要

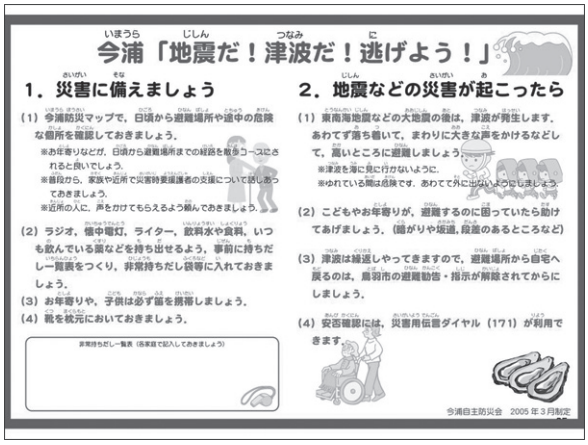
- 世帯数：約100世帯
- 人口：約400名
- 漁業・水産業が主要産業，地元就業者が多い.
- 高齢化率：約30%
- 自治会組織は，10～15世帯１組の以下の6組
  - 花崎組，城越組，横町組，中組，田村家組，板敷組
- 自主防災組織あり

33

## 鳥羽市今浦地区の取組の内容

1. 自治会・自主防災会での計画づくり
   - 防災地図の作成，取組の計画立案
2. 地震・津波を想定した一斉避難訓練
   - 訓練＋反省会
3. 地震・津波の勉強会
   - 座学＋実習
4. 今浦地区でのローカルルールの策定
   - グループワークによる防災マニュアルの策定
   - 自主防災会主動の継続的な活動計画立案

34



今浦「地震だ！津波だ！逃げよう！」

1．災害に備えましょう

（1）今浦防災マップで，日頃から避難場所や途中の危険な個所を確認しておきましょう。
※お任寄りなどが，日頃から避難場所までの経路を散歩コースにされると良いでしょう。
※普段から，家族や近所で災害時要援護者の支援について話しあっておきましょう。
※近所の人に，声をかけてもらえるよう頼んであきましょう。

（2）ラジオ，懐中電灯，ライター，飲料水や食料，いつも飲んでいる薬などを持ち出せるよう，事前に持ちだし一覧表をつくり，非常持ちだし袋等に入れておきましょう。

（3）お年寄りや，子供は必ず笛を携帯しましょう。

（4）靴を枕元においておきましょう。

非常持ちだし一覧表（各家庭で記入しておきましょう）

2．地震などの災害が起こったら

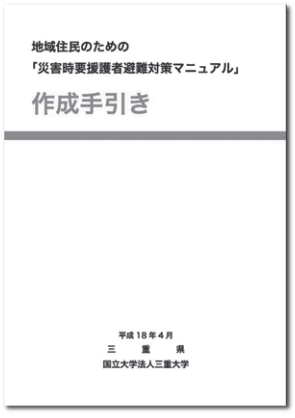
（1）東南海地震などの大地震の後は，津波が発生します。あわてず落ち着いて，まわりに大きな声をかけるなどして，高いところに避難しましょう。
※津波を海に見に行かないように。
※ゆれている間は危険です。あわてて外に出ないようにしましょう。

（2）こどもやお年寄りが，避難するのに困っていたら助けてあげましょう。（細がりや坂道，段差のあるところなど）

（3）津波は繰返しやってきますので，避難場所から自宅へ戻るのは，鳥羽市の避難勧告・指示が解除されてからにしましょう。

（4）安否確認には，災害用伝言ダイヤル（171）が利用できます。

今浦自主防災会　2005年3月制定



地域住民のための
「災害時要援護者避難対策マニュアル」
作成手引き

平成18年4月
三　重　県
国立大学法人三重大学

36

## 海岸利用者の避難対策の検討事業

HT7 三重県-三重大学共同研究

- 取組のきっかけは，三重県の観光客地震対策事業
- 年間約4000万人の観光客が訪れる三重県
- 年間約1000万人の観光客が訪れる伊勢志摩地方
- 東海・東南海・南海地震と津波災害の発生の可能性
- 観光客を含む海岸利用者の安全確保の必要性
- 行政と自治会だけではなく地域に関連する「多様な主体」が一丸となった防災対策の検討
- モデル地域として志摩市を選定

37

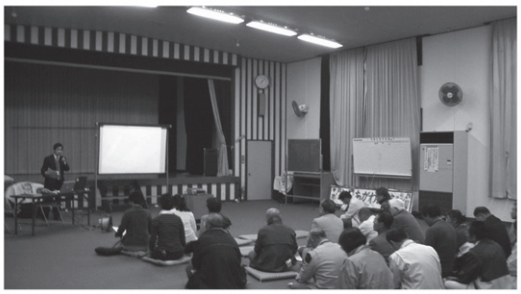
## 国府白浜~阿児の松原海岸の特徴

- 全長 3 km 以上に及ぶ長い海岸線
- 海岸に沿った種類の異なる堤防（波返し有無）
- 海岸線に沿ったゴルフ場
- 海岸内側の低地に密集住宅地（国府地区）
- 年中多数のサーファーが海岸を利用
- 夏季には阿児の松原海岸に多数の海水浴客
- サーファー・海水浴客向け駐車場が点在
- 海岸から高台までかなり遠い

38

## 取組の経過

- 地元説明会@甲賀公民館（2005.10.26）
  - 地域住民，関係事業者対象の説明会を開催



39

## 取組の経過

- 第１回ワーキング@国府公民館（2005.11.4）
  - 現状と問題点の整理・共有
  - それぞれの立場で，問題解決のアイデアを出しあい，海岸利用者の避難体制を協力して構築することを確認

40

## 取組の経過

- 第２回ワーキング@甲賀公民館+現地（2005.12.1）
  - 現地調査で避難場所，避難ルートなどを確認
  - 海岸を3エリアに分け各エリアごとの最適避難所の提案

41

## 取組の経過

- 第３回ワーキング@国府公民館（2005.12.19）
  - 呼びかけ，堤防内へ誘導，避難場所への誘導の３段階避難を検討
  - 海岸利用者への事前啓発手法に関する検討

42

第４分科会

## 取組の経過

- 第４回ワーキング@甲賀公民館（2006.1.12）
  - 避難マップの作成と啓発について
  - 打ちあげ式津波情報伝達装置「つなぴ」の活用について

43

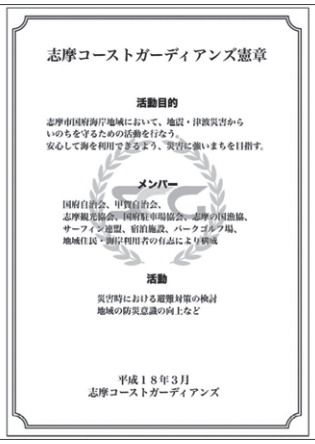
## 取組の経過

- 第５回ワーキング@国府公民館（2006.2.9）
  - この活動を継続的に行う活動母体として「志摩コーストガーディアンズ」の結成を検討
  - SCGを中心とした津波避難訓練実施について検討

44

コースト　ガーディアンズ
Coast　Guardians
海岸・沿岸　保護者・守護者・監視者

45



志摩コーストガーディアンズ憲章

**活動目的**

志摩市国府海岸地域において、地震・津波災害から
いのちを守るための活動を行なう。
安心して海を利用できるよう、災害に強いまちを目指す。

**メンバー**

国府自治会、甲賀自治会、
志摩観光協会、国府駐車場協会、志摩の国漁協、
サーフィン連盟、宿泊施設、パークゴルフ場、
地域住民・海岸利用者の有志により構成

**活動**

災害時における避難対策の検討
地域の防災意識の向上など

平成１８年３月
志摩コーストガーディアンズ

46

## その後の活動

- 志摩コーストガーディアンズ幹事会（計３回開催）
  - 組織の運営方式の検討
  - ガーディアンズ旗揚式，津波避難訓練の計画

47

## その後の活動

- サーフィン連盟避難訓練（2006.5.28, 6.25）
  - ハンドサイレン吹鳴による海から堤防まで上がる自主訓練
  - 平均的に2分～5分で堤防まで避難完了

48

## SCG主催　津波避難訓練

- 日時：7月30日（日）10:00地震発生想定
- サーファー・海水浴客の方：打上式津波情報伝達装置の合図で海から堤防まで避難
- 住民の皆さん：防災無線および打上式津波情報伝達装置の合図で指定避難場所まで避難
- 漁業関係者の皆さん（海女さん）：打上式津波情報伝達装置の合図で避難行動
- 駐車場・観光協会：観光客の皆さんに訓練への参加協力依頼

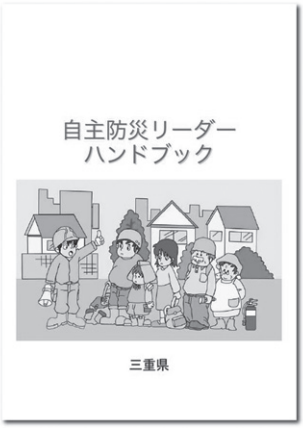
49

50

## 主要事業②（三重県関連）

- 施策策定等
  - 三重県自主防活性化委員会（03-05）
  - 密集市街地整備基本方針（04-05）
  - 地域防災計画被害想定調査委員会（03-05）
  - 三重県防災事業推進委員会（03-）
  - 三重県防災図上訓練の評価（04-）
  - 三重県総合防災訓練の評価（05-）
  - みえ防災コーディネータ育成講座へ講師派遣（04-）
  - 三重県地域防災ネットワーク会議（05-）
  - 三重県木造住宅耐震化推進会議（05-06）
  - 啓発コンテンツ開発・啓発誌監修・啓発番組監修

51




52

53

54

55

## 市町との連携

- 施策策定支援：
  - 総合計画，地域防災計画
  - 防災マップ
- 自主防災活動支援・災害時要援護者対策支援
- 災害対策支援：
  - 図上訓練，実働訓練支援
- 市民啓発事業への協力

56

## 市民活動との連携

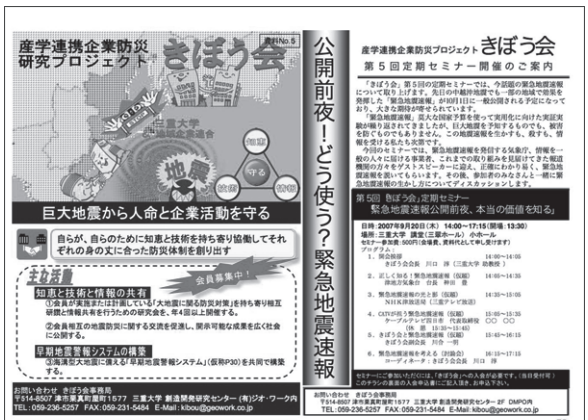
- 防災子供サミット（04-）
  - 防災ボランティアネットワーク鈴鹿と連携
- 学校教育支援（04-）
  - 小中高等学校における防災学習支援
- 自衛隊との防災研究会（06-）
- 防災ボランティアコーディネータ育成講座（07-）
  - 講師派遣・ワークショップ協力
- NPO法人「ミューチャルエイド東海」設立（07-）
  - ワークショップ運営等の支援

57

## 企業などとの連携

- 産学連携企業防災研究プロジェクト「きぼう会」
  - 地域の中小企業の連携の場の設置（05-）
  - 年数回のセミナーの開催
  - 地域地震情報(株)の設立（06）
    - 緊急地震速報の配信と訓練支援
- みえいのちを守るアクションプロジェクト MAPPL （05-）
  - この地域の報道関係者の勉強会，07きぼう会の１部に統合
- 大規模小売店と地域の連携プロジェクト支援（05-）
  - 発災時の連携体制の立案・訓練実施（共同研究）
- ライフライン企業の防災対策支援（06-）
  - 社員の防災意識調査，訓練支援（共同研究）

58



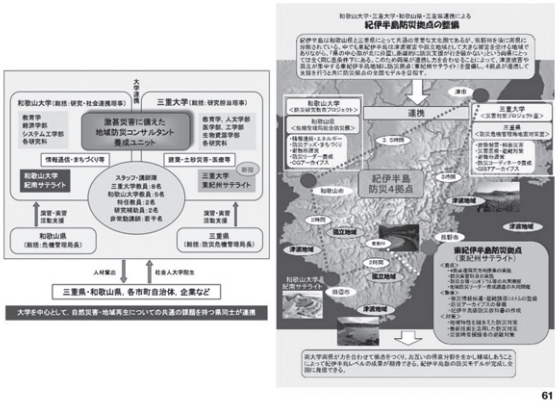

59

## 大学間連携

- 和歌山大学との共同事業
  - 防災セミナー（05-06）
  - 防災合宿 in 熊野川（05）
  - 地震シンポ@熊野市（06）
  - JST振興調整費申請（05-06）

60

第４分科会




## 我々(三重大)が志向してきたこと

- 行政や企業のお抱えの「お墨付きを与える識者」ではなく，地域の知の拠点・人の輪の拠点として，常に「市民目線」で「防災」を考えてきたこと．
- 出来るだけそういう思想の仲間を学内外に増やしてきたこと．
  - でも…

62

## 終わり

ご静聴ありがとうございました．

63

# ボランティアと市民社会：阪神・淡路大震災と東日本大震災からの問題提起

東京大学 名誉教授　似田貝 香門

## ０．似田貝香門の自己紹介

専門領域

1　社会思想
2　住民運動論（環境問題、市民運動・活動論を含む）
3　ボランティア論・支援者論
4　地域社会学・都市社会学
5　都市官僚制と公共政策・都市計画論
6 社会学方法／実証研究方法論

「准看護婦問題検討会准看護婦問題調査」〔1995 ～ 1996〕

## １．阪神・淡路大震災で出現した新しい支援の論理

阪神・淡路大震災（1995 年）のボランティア活動は、167 万人（平成 9 年 5 月 31 日現在）もの多数のボランティア活動と、文字通り、被災者の〈生〉の緊急支援と、被災者の自立支援について、生活や地域という場所に根づく支援の実践として、社会に大きなインパクトを与えた

### １）〈生の固有性〉という視点

### ①　支援者の実践語

「人間の生活があり、生活する人間がいる」
「ひととしてのいのちを重んじる」、
「最後まで生ききること」
「たった一人を大切に」、「最後のひとりまで見棄てない」（村井雅清）
「一人の人としてのいのちを重んじる」、「その人らしいケアの本質を見ていくこと」、「最後まで生ききること・自立」（黒田裕子）
「最後のひとりまで目線をむける」

### ②ひとりの人として命を大切に

→支援活動に強力に伝わってくるのは、強烈な、生命こそ人間を人間ならし

めるもの、という個々の被災者のもつ１回きりの命への支援、
あるいは個々の人の歩んできた生への支援への〈こだわり〉
＊〈こだわり〉とは。

**③「約束・関与＝責任（engagement）」**

〈こだわり〉とは
生命こそ人間を人間ならしめるもの、という個々の被災者のもつ１回きりの命への支援、あるいは個々の人の歩んできた生への支援へのこだわり
こだわりとは、〈約束・関与＝責任 engagement〉
「最も弱い者への配慮」→「出会う」
→「ふれあい」→「今あることに全力を尽くす」という実践の継起性

**支援者の被災者の希望へのこうした余儀ない関与とは、支援し続ける約束であり、同時に自己への拘束である。こうした応答関係は責任（engagement）と呼ばれよう。**

**④自立支援の新たなる実践思想**

被災者各自の「いのち」、「くらし」の「他ならなさ uniqueness」（アーレント）という視点に「こだわる」自立支援の新たなる実践思想の生起
〈生の固有性〉の実践思想
匿名的被災者一般を支援の対象とするのではなく、「ひとりひとりに向かう支援」。
「いのち」、「くらし」「地域」にこだわって自立を支援する基本視点

阪神・淡路大震災の支援活動が生み出した〈生の固有性〉の実践思想

**⑤自立生活とは「支え合い」**

支援活動の〈生の固有性〉という視点こそ、大震災の支援活動の最も特異な視点であった。
個々の人間の生存様式としての固有性に「こだわる」支援行為である。
そして、この特異的な支援の基本思想は、**「自立・自律とは『支え合いである』」という〈実践知〉に結実する**

**２）〈実践知〉**

**①現場 field で適切な判断をくだすことができる能力**

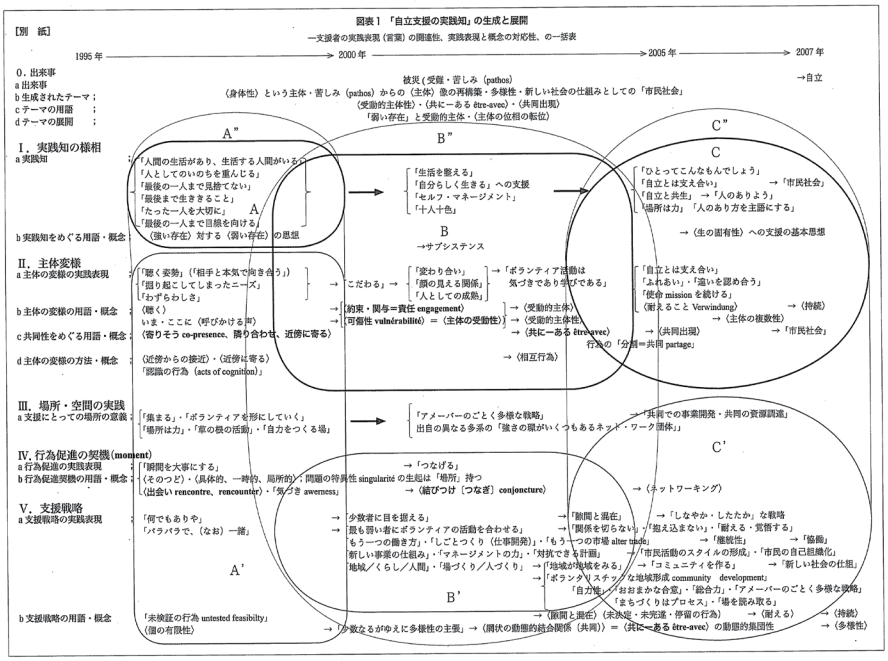
古代ギリシャではフロネーシス phronesis［知慮］
実践の現場 field で適切な判断をくだすことができる能力のこと。
被災者の支援が必要なとき、つまり、**〈そのつど〉、〈具体的、一時的、局所的〉**に、**支援者がその実践のあり方を決定する、支援者の動機づけと経験よって結びあわされた諸判断の知**のことである。

**②知 = 実践の経験知**

支援は、言葉を相互に交わすことによる社会関係性を形成しながら、伝達される。
→〈実践知〉は、被災者の〈呼びかけの声〉に応答し、応え、受け合うことによって形成される実践理性。
　したがって、〈実践知〉とは、現場 field から紡ぎ出され、人々によって現場 field で常に検証されつづける、知 = 実践の経験知である

③現場 field の行動基準

**この意味で〈実践知〉は、被災者の〈呼びかけの声〉に応答し、応え、受け合うことによって形成される緊急時における field での行動基準である。**



**３）災害ボランティアにとって生成されテーマ**

**①受難と「苦しみ」（pathos）**

被災という受難；

→〈身体性〉と「苦しみ」（pathos）

被災を被るという事態は、人々の身体性をして、自らが弱く、また苦しみを受ける、という受苦性の認識

**② 苦しみ（pathos）と自立**

災害ボランティアにとって生成されテーマ；

→ 被災者の立ち直り

→ そのような被災者の自立の支援

「痛み」、「苦しみ」こそが、現代社会の社会学的なテーマ

**被災者の自立へ支援活動を介して、苦しみ pathos の中で、人が取り結ぼうとする共時的関係性という、新しい関係性を形成させる可能性**

**③〈そのつど〉・〈具体的、一時的、局所的〉**

支援者にとって、**〈そのつど〉生起し、刻々と変化する現場で、「いま・ここに」何が重要か、何が必要なのか、について、支援者の経験に導かれ、直観し、知覚し、〈具体的、一時的、局所的〉に判断と決断とともに、それを実践に移すのが〈実践知〉**である。

それは経験によって深まる。

**４）支援活動の様相**

意思決定；そのつど、〈具体的、一時的、局所的〉

受け入れ・歓待 hospitality

空間（支援基地；受け入れの空間）

〈越境的ダイナミスム〉　ノマド

〈結びつけ〔つなぎ〕conjoncture〉

**５）大学と災害時の支援活動**

事実の多様性

弱さへの関心

繋がり（顔の見える＝匿名性でない、他者への配慮と〈居合わす co-presence〉

大学の社会的連携

（2）東京大学被災地支援ネットワークの例

①呼びかけと活動原則

研究者は「職能ボランティア」として支援を

研究職の方は「職能ボランティア」として被災地に関わって欲しい。

第1義の活動；単に研究活動のためでなく、被災地や被災者の自律・自立支援のため関わる努力をして欲しい。

支援活動が、結果として研究活動に関わる様な、実践的対応をこの際工夫して欲しい。

活動が直接支援に結びつかなくとも、少なくともその活動が、将来の被災地域の再生、被災者の自律・自立、 防災、減災等にかかわり、人の「いのち」と「くらし」をまもるものと関わる様な努力をして欲しい。

被災地にて、被災者当事者、あるいは被災地の研究機関、支援団体が組織化を図りつつあったら、可能な限り、それを支援する体制をとって欲しい。

②後方支援組織への参加

「遠野まごころネット」に外部団体として参加

→東京大学にも呼びかけ、宿泊施設を独自につくる（既に、日本財団が建設、静岡県ボランティア、神戸被災地NGO協働センター等が管理）。

東京大学被災地支援ネットワークはアドバイザリーボード委員（似田貝）。

＊〈職能ボランティア〉

＊＊後方支援組織とは

＊＊被災地の諸支援組織の運営方法；

③〈職能ボランティア〉

日本のボランティア活動の弱さ

→1995年4月にはほとんど外部ボランティアはゼロ

入門としてのボランティア；

ボランティア活動は、「無償性、自発性、アマチュア性、自己実現、パート・タイム」

④実践としてのネットワークの難しさ

テーマの度に主要団体の組み合わせ。

→テーマはわかっていても、そのたびに諸組織を〈結びつけ〔つなぎ〕conjoncture〉＝ネット化することの難しさ。コーディネーター、ファシリテーターにとって、情報が最も不可欠

ネットワークの活動動態の可視化の難しさ
ネットワークを〈そのつど〉の「われわれ」という〈主体としての複数性〉とすれば、この主体は閉じられていない主体。

**（3）東京大学への提案**

東日本大震災に関する大学固有の mission と、責任ある支援体制を組織化
→ 総長の新入生への Message
→「東日本大震災に関する救援・復興支援室」
支援体制への学内の学生ボランティア参加（未）
プログラム実践の実効的行為意思決定の際、大学行政組織の責任の考え方と、支援者（ボランティア）の責任の考え方が異なる（未）

**《行政組織の責任》**;
依法性、説明の論理、従来の公平性・平等性の枠組、活動対象
**《支援者の責任》**;
応答性、必要なもの・必要な活動を必要なところに、
支援活動にはさまざまな工夫＊
ふれあいがあるところではルールはいらない。
〈実践知〉
活動対象は支援の隙間おかれている人々

**課題点**

大学組織は、支援活動、個人の登録・管理・許可（いわば業務となっている）。routine 化
「ボランティア派遣」という言語

**（4）東北学院大学の被災地支援の大学間連携**

2011 年 8 月以降、東北学院大学を基地として、
主として mission school の大学 14 校が被災地　気仙沼支援
全国の大学に呼びかけ、被災地支援の学生立ちの被災地での受け入れや、支援の coordinate
この大学は集まり、symposium
大学当局、教職員、学生の相互の連携のあり方を垣間見える　2 日間学生の報告・symposium

大学、文字通り、全国の支援者を、限りなく、最大限に受け入れる場所として、またこのような symposium や報告会を重ねる毎に、形成される学生間の関係性、被災地との関係性の生成空間が生み出されていることこそが、受け入れ・歓待 hospitalité の場所と呼ばれるべきもの。

この大学と、それに連なる全国の大学のつくりあげている活動空間こそが、東日本大震災の課題の一つ、後方支援の、一つのモデルとなる

**6）.「語られることと共に語り直される」ことの必要性**

**〈使命 mission は確実に完遂されることはない〉**；そのつど、愚直に初心や mission に**〈立ち戻り〉、〈語り継ぐ〉）**

私的なことで申し訳ありませんが、95 年の阪神・淡路大震災直後から今日までの支援者の調査から、私は、mission について以下のことを彼らから学びました。

使命 mission は、確実に約束されたものでないということです。
つまり完遂され、終わったものでないのです。その使命 mission は、常に初発点であり、経過的であり、未完遂なもの、つまり becoming なものです。

志（mission）の持続は、支援の〈実践知〉本来持っている時間性（歴史性）、すなわち、「すでに」と「まだ～でない」の緊張関係のなかにある。

使命ミッションとは、このように、〈実践知〉の過去と現在に意味を与えてくれる未来への、約束事なのだ

そしてその使命 mission は、いまだ実現されていない、未検証 untested feasibility の状態にあるのです。

私たちはいつでも志 mission へ〈立ち戻り〉、そして再び〈語りなおし〉をして行かねばならない。

〈苦しみ（pathos）を語られた者、すなわち苦しみの声を聴いた実践

者自身が、自己の人生の経験を介して、厳にその苦しみが「存在するもの」として了解し、
そして他者に「語りなおされ」、「事実を再度あらわす」必要があることを努めて自覚せざるを得ない、ということであったと思う。

7）大学の被災地支援の mission

支援の使命 mission が一旦たてられたら、教育、組織運営、構成員の活動のすべての基礎・根拠に据えられる必要

時間の経過は、被災を忘却する。
全学の構成員がこのミッションに〈たちもどり〉、
かつ次世代に〈語りなおす〉という大学人の行為。

大学コンソーシアム京都(京都産業大学2012/03/04)
第17回FDフォーラム
第4分科会テーマ「災害対策と大学ー私たちが担う役割は何か」
似田貝　香門（東京大学名誉教授）

# 「ボランティアと市民社会：阪神・淡路大震災と東日本大震災からの問題提起」

## 0. 似田貝香門の自己紹介
## 専門領域

- 1 社会思想
- 2 住民運動論（環境問題、市民運動・活動論を含む）
- 3 ボランティア論・支援者論
- 4 地域社会学・都市社会学
- 5 都市官僚制と公共政策・都市計画論
- 6 社会学方法／実証研究方法論
- 「准看護婦問題検討会准看護婦問題調査」〔1995～1996〕

2

## はじめに/報告の内容

➢概要

## 1. 阪神・淡路大震災で出現した新しい支援の論理

阪神・淡路大震災（1995年）のボランティア活動は、167万人（平成9年5月31日現在）もの多数のボランティア活動と、文字通り、被災者の〈生〉の緊急支援と、被災者の自立支援について、生活や地域という場所に根づく支援の実践として、社会に大きなインパクトを与えた

## (2)支援者（ボランティア）とは；阪神・淡路大震災で出現した新しい支援の論理

- ① 支援者の実践語
- 「人間の生活があり、生活する人間がいる」
- 「ひとととしてのいのちを重んじる」、
- 「最後まで生ききること」
- 「たった一人を大切に」、「最後のひとりまで見棄てない」（村井雅清）
- 「一人の人としてのいのちを重んじる」、「その人らしいケアの本質を見ていくこと」、「最後まで生ききること・自立」（黒田裕子）
- 「最後のひとりまで目線をむける」
-

5

## 1）〈生の固有性〉という視点
## ②ひとりの人として命を大切に

- →支援活動に強力に伝わってくるのは、強烈な、生命こそ人間を人間ならしめるもの、という個々の被災者のもつ1回きりの命への支援、
- あるいは個々の人の歩んできた生への支援への〈こだわり〉
- ＊〈こだわり〉とは。

6

## 1)〈生の固有性〉という視点
## ③「約束・関与＝責任（engagement）」

- 〈こだわり〉とは
- 生命こそ人間を人間ならしめるもの、という個々の被災者のもつ1回きりの命への支援、あるいは個々の人の歩んできた生への支援へのこだわり
- こだわりとは、〈約束・関与＝責任engagement〉
- 「最も弱い者への配慮」→「出会う」
- →「ふれあい」→「今あることに全力を尽くす」という実践の継起性

7

## 1)〈生の固有性〉という視点
## ③「約束・関与＝責任（engagement）」

- 支援者の被災者の希望へのこうした余儀ない関与とは、支援し続ける約束であり、同時に自己への拘束である。こうした応答関係は責任（engagement）と呼ばれよう。

## 1.〈生の固有性〉という視点
## ④自立支援の新たなる実践思想

- 自立支援の新たなる実践思想
- 被災者各自の「いのち」、「くらし」の「他ならなさuniqueness」〈アーレント〉という視点に「こだわる」自立支援の新たなる実践思想の生起
- 〈生の固有性〉の実践思想
- 匿名的被災者一般を支援の対象とするのではなく、「ひとりひとり」に向かう支援」。
- 「いのち」、「くらし」「地域」にこだわって自立を支援する基本視点
- 阪神・淡路大震災が生み出した〈生の固有性〉の実践思想。

9

## 1.〈生の固有性〉という視点
## ⑤自立生活とは「支え合い」

- 支援活動の〈生の固有性〉という視点こそ、大震災の支援活動の最も特異な視点であった。
- ↓
- 個々の人間の生存様式としての固有性に「こだわる」支援行為である
- ↓
- そして、この特異的な支援の基本思想は、「自立・自律とは『支え合いである』」という〈実践知〉に結実する

## 2.〈実践知〉
## ①現場fieldで適切な判断をくだすことができる能力

- **〈実践知〉**
- 古代ギリシャではフロネーシスphronesis［知慮］
- 実践の現場fieldで適切な判断をくだすことができる能力のこと。
- 被災者の支援が必要なとき、つまり、〈そのつど〉、〈具体的、一時的、局所的〉に、支援者がその実践のあり方を決定する、支援者の動機づけと経験よって結びあわされた諸判断の知のことである。

11

## 2.〈実践知〉
## ②知＝実践の経験知

- 支援は、言葉を相互に交わすことによる社会関係性を形成しながら、伝達される。
- →〈実践知〉は、被災者の〈呼びかけの声〉に応答し、応え、受け合うことによって形成される実践理性。
- したがって、〈実践知〉とは、現場fieldから紡ぎ出され、人々によって現場fieldで常に検証されつづける、知=実践の経験知である

12

第4分科会

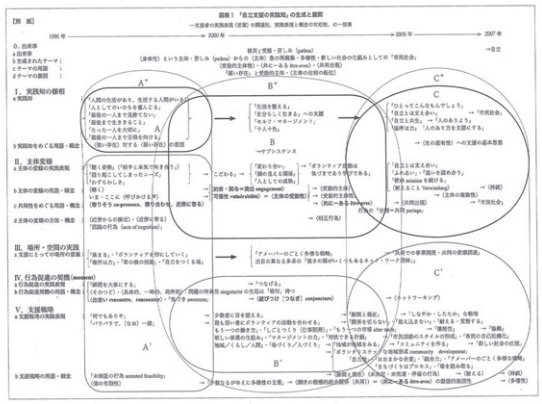
## 2.〈実践知〉
## ③〈そのつど〉・〈具体的、一時的、局所的〉

- 支援者にとって、〈そのつど〉生起し、刻々と変化する現場で、「いま・ここに」何が重要か、何が必要なのか、について、支援者の経験に導かれ、直観し、知覚し、〈具体的、一時的、局所的〉に判断と決断とともに、それを実践に移すのが〈実践知〉である。
- それは経験によって深まる。

13

## 2.〈実践知〉
## ③現場fieldの行動基準

- **この意味で〈実践知〉は、被災者の〈呼びかけの声〉に応答し、応え、受け合うことによって形成される、緊急時におけるfieldでの行動基準である**



## 2）災害ボランティアにとって生成されテーマ　①受難と「苦しみ」（pathos）；

- 被災という受難；
- →〈身体性〉と「苦しみ」（pathos）
- 被災を被るという事態は、人々の身体性をして、自らが弱く、また苦しみを受ける、という受苦性の認識

16

## 2）災害ボランティアにとって生成されテーマ
## ② 苦しみ（pathos）と自立

- 災害ボランティアにとって生成されテーマ；
- →被災者の立ち直り
- →そのような被災者の自立の支援
- 「痛み」、「苦しみ」こそが、現代社会の社会学的なテーマ
- 被災者の自立へ支援活動を介して、苦しみpathosの中で、人が取り結ぼうとする共時的関係性という、新しい関係性を形成させる可能性

17

## 2）災害ボランティアにとって生成されテーマ
## ① 苦しみ（pathos）と自立

- 災害ボランティアにとって生成されテーマ；
- →被災者の立ち直り
- →そのような被災者の自立の支援
- 「痛み」、「苦しみ」こそが、現代社会の社会学的なテーマ
- 被災者の自立へ支援活動を介して、苦しみpathosの中で、人が取り結ぼうとする共時的関係性という、新しい関係性を形成させる可能性

18

第4分科会

## 4）支援活動の様相

- 意思決定；そのつど、〈具体的、一時的、局所的〉
- 受け入れ・歓待hospitality
- 空間（支援基地；受け入れの空間）
- 〈越境的ダイナミスム〉 ノマド
- 〈結びつけ〔つなぎ〕conjoncture〉

## 5）大学と災害時の支援活動

- 事実の多様性
- 弱さへの関心
- 繋がり（顔の見える＝匿名性でない、他者への配慮と〈居合わせるco-presence〉
- 大学の社会的連携

## 5）大学と災害時の支援活動（2）東京大学被災地支援ネットワーク

- ①呼びかけと活動原則
- 研究者は「職能ボランティア」として支援を
- 研究職の方は「職能ボランティア」として被災地に関わって欲しい。
- 第1義の活動；単に研究活動のためでなく、被災地や被災者の自律・自立支援のため関わる努力をして欲しい。
- 支援活動が、結果として研究活動に関わる様な、実践的対応をこの際工夫して欲しい。
- 活動が直接支援に結びつかなくとも、少なくともその活動が、将来の被災地域の再生、被災者の自律・自立、防災、減災等にかかわり、人の「いのち」と「くらし」をまもるものと関わる様な努力をして欲しい。
- 被災地にて、被災者当事者、あるいは被災地の研究機関、支援団体が組織化を図りつつあったら、可能な限り、それを支援する体制をとって欲しい。

## 5）大学と災害時の支援活動（2）東京大学被災地支援ネットワーク

- ②後方支援組織への参加
- 「遠野まごころネット」に外部団体として参加
- →東京大学にも呼びかけ、宿泊施設を独自につくる（既に、日本財団は建設、静岡県ボランティア、神戸被災　地NGO協働センター等が管理）。
- 東京大学被災地支援ネットワークはアドバイザリーボード委員。
- ＊〈職能ボランティア〉
- ＊＊後方支援組織とは
- ＊＊被災地の諸支援組織の運営方法；

## 5）大学と災害時の支援活動（2）東京大学被災地支援ネットワーク

- ④実践としてのネットワークの難しさ
- テーマの度に主要団体の組み合わせ。
- →テーマはわかっていても、そのたびに諸組織を〈結びつけ〔つなぎ〕conjoncture〉＝ネット化することの難しさ。コーディネーター、ファシリテーターにとって、情報が最も不可欠
- ネットワークの活動動態の可視化の難しさ
- ネットワークを〈そのつど〉の「われわれ」という〈主体としての複数性〉とすれば、この主体は閉じられたいない主体。

## 5）大学と災害時の支援活動（2）東京大学被災地支援ネットワーク

- ③〈職能ボランティア〉
- 日本のボランティア活動の弱さ
- →1995年4月にはほとんど外部ボランティアはゼロ
- 入門としてのボランティア；
- ボランティア活動は、「無償性、自発性、アマチュア性、自己実現、パート・タイム」

## 5）大学と災害時の支援活動
## （3）東京大学への提案

- 東日本大震災に関する大学固有のmissionと、責任ある支援体制を組織化
- →総長の新入生へのMessage
- →「東日本大震災に関する救援・復興支援室」
- 支援体制への学内の学生ボランティア参加（未）
- プログラム実践の実効的行為意思決定の際、大学行政組織の責任の考え方と、支援者（ボランティア）の責任の考え方が異なる（未）

## 5）大学と災害時の支援活動
## （3）東京大学への提案

- 《行政組織の責任》;
- 依法性、説明の論理、従来の公平性・平等性の
- 枠組、活動対象
- 《支援者の責任》;
- 応答性、必要なもの・必要な活動を必要なところ
- に、
- 支援活動にはさまざまな工夫＊
- ふれあいがあるところではルールはいらない。
- 〈実践知〉
- 活動対象は支援の隙間おかれている人々

## 5）大学と災害時の支援活動
## （4）課題点;

- 大学組織は、支援活動、個人の登録・管理・許可（いわば業務となっている）。routine化
- 「ボランティア派遣」という言語

## 5）大学と災害時の支援活動
## （4）東北学院大学の被災地支援の大学間連携

- 2011年8月以降、東北学院大学を基地として、
- 主としてmission schoolの大学14校が被災地　気仙沼支援
- 全国の大学に呼びかけ、被災地支援の学生立ちの被災地での受け入れや、支援のcoordinate
- この大学は集まり、symposium
- 大学当局、教職員、学生の相互の連携のあり方を垣間見える　2日間の学生の報告・symposium

## 5）大学と災害時の支援活動
## （4）東北学院大学の被災地支援の大学間連携

- 大学、文字通り、全国の支援者を、限りなく、最大限に受け入れる場所として、またこのような
- symposiumや報告会を重ねる毎に、形成される学生間の関係性、被災地との関係性の生成空間が生み出されていることこそが、受け入れ・歓待hospitaliteの場所と呼ばれるべきもの。
- この大学と、それに連なる全国の大学のつくりあげている活動空間こそが、東日本大震災の課題の一つ、後方支援の、一つのモデルとなる

## 6）.「語られることと共に語り直される」ことの必要性（1）

- 〈使命missionは確実に完遂されることはない〉;そのつど、愚直に初心やmissionに〈立ち戻り〉、〈語り継ぐ〉）
- 私的なことで申し訳ありませんが、95年の阪神・淡路大震災直後から今日までの支援者の調査から、私は、missionについて以下のことを彼らから学びました。

30

第4分科会

## 6)「語られることと共に語り直される」ことの必要性(2)

- 使命missionは、確実に約束されたものでないということです。
- つまり完遂され、終わったものでないのです。その使命missionは、常に初発点であり、経過的であり、未完遂なもの、つまりbecomingなものです。

31

## 6). 「語られることと共に語り直される」ことの必要性(3)

- 志(mission)の持続は、支援の〈実践知〉本来持っている時間性(歴史性)、すなわち、「すでに」と「まだ～でない」の緊張関係のなかにある。
- 使命ミッションとは、このように、〈実践知〉の過去と現在に意味を与えてくれる未来への、約束事なのだ
- そしてその使命missionは、いまだ実現されていない、未検証untested feasibilityの状態にあるのです。
- 私たちはいつでも志missionへ〈立ち戻り〉、そして再び〈語りなおし〉をして行かねばならない。

32

## 6)「語られることと共に語り直される」ことの必要性(4)

- 〈苦しみ(pathos)を語られた者、すなわち苦しみの声を聴いた実践者自身が、自己の人生の経験を介して、厳にその苦しみが「存在するもの」として了解し、
- そして他者に「語りなおされ」、「事実を再度あらわす」必要がある、ことを努めて自覚せざるを得ない、ということであったと思う。

33

## 7)大学の被災地支援のmission

- 支援の使命missionが一旦たてられたら、教育、組織運営、構成員の活動のすべての基礎/根拠に据えられる必要
- 時間の経過は、被災を忘却する。
- 全学の構成員がこのミッションに〈たちもどり〉、
- かつ次世代に〈語りなおす〉という大学人の行為。